



芦屋「九条の会」ニュース

発行責任者：片岡 隆
連絡先 090-7118-2312

「無言館」館主・窪島誠一郎さんを迎えて

生きる事、平和の大切さを共感！

芦屋「九条の会」9周年記念のつどいを6月28日、「無言館」館主で作家の窪島誠一郎さんを講師に迎えて開催しました。

今回のテーマは「戦没画学生からの伝言～いのちの叫び～」で、9条に余り関心のない方や若い方の参加を願っていました。新聞に記事が掲載されてからは今までにない多くの問い合わせがあり、関心の高さを感じました。当日はやはり超満員の230人の参加で、用意した資料も足りない状況でした。

窪島さんのお話も、自分の苦しい生活のことや偶然に出会った天才画家・村山槐多のこと、画家・野見山暁治さんとの出会いでいろいろと語るうちに「放っておくと彼らの絵が無くなってしまおう」と思い尋ね歩いたと話されました。



そして「一枚の絵はその人たちの人生がつまっている」「彼らは愛する人を描いた」「存命の喜びを描いた」「ありがとうと言う感謝を描いた」「生きる素晴らしさを描いた」と話され、「無言館は反戦・平和の美術館と言われるがそのとおりです」「変わらぬ9条の大切さに気付くことは当然です」と言われ、「あなたはどうか生きるかを問うている」と投げかけられて終了しました。あっという間の2時間でした。

終了後44人の方から感想が寄せられました。そのうち3人の方の感想を紹介します。

- 反戦の思い、あたたかくじんわりと心にしみました。戦死された人々を思いました。私の叔父も23才で戦死しました。母はなくなるまで弟のことを言っていました。そのことを思い出しました。
- 思いがけず生い立ちからのお話を伺ったが、話が進むうち美術への飽くなき情熱がひしひしと感じられた。戦後半世紀を経て、志半ばで散られた多くの方々の作品が無言館に集結したことに感動。これまで部分的な展示を拝見しているが、ぜひ本館を訪れたい。反戦平和、特攻隊員のこと。
- すばらしいお話が聞けた事に感動しています。永い人生の中でのめぐり合いが自分の人生や生き方をどうかえてゆくか。しかし、己の中にそれ丈の感性を持ち合わせていなければ、どんな素晴らしい出逢いも無に等しいものとなるでしょう。窪島先生の気どりのない心に沁みる話感動しました。

<裏面に続く>